

二〇一五年一月二三日 開催 〈本学英米語学科 共催〉

## 映画字幕翻訳の世界と英語習得

戸田奈津子

(執筆 石坂朋美・大平桃子)

■ 講演者……戸田奈津子(本学客員教授・映画字幕翻訳者)

■ 司 会……矢頭典枝、須賀大悟(佐野学園本部 企画部課長)

本日は高校生もいらつしやるということで、幅広い方が聞いてくださいますから、少し気楽な話をしたいと思います。みなさんには、大学生の時期ほど自由な時間はないということを意識してほしいと思います。自分の時間をこれほどコントロールできる時間はありませんから、まずは大学時代を楽しんでほしいです。もう一つ、頭の片隅に置いておいてほしいのは自分の将来を見つめる時間を作ることです。

将来のことを考えるにあたっての私からのアドバイスとして、みなさんは「語学を学んで何をしたいのか」を考えるといいでしょう。みなさんが学んでいる語学は、いわゆる道具です。道具の使い方を学んでいるということです。例えば、

大工さんはかんなの使い方を練習しますね。でも、かんなの使い方だけをマスターしてもどうしようもないでしょう。重要なのは、「かんなを使って磨き上げた木材で何ができるか」ということであって、語学においても同じです。

私の場合は、「何がしたいか」ということは早くに見つけました。スタートラインは、映画が大好きだったということ。語学は、「勉強をしよう」と思って始めたわけではありません。映画がきっかけで「映画で聞く言葉について知りたい」という気持ちが自然と湧いて始めたのです。好きな物のことを知ろうとするのは当たり前のことですね。「自分は何が好きで、何を極めたいのか」と考えるべきです。

好きなことの周辺には、必ず、みなさんが好きな仕事があるはず。そういうことを、英語では「gift」といいます。「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、私は、とても奥が深く、的を得ている言葉だと思います。好きなこととは上手になれるんです。嫌なことは上手にはなれない。ミ



戸田奈津子先生

ケランジェロやモーツァルトなどの偉人たちも、皆、小さな頃から絵や音楽などが好きで、彼らの<sup>99</sup>を生かして大成しました。みなさんにも、同じことが言えるはずです。好きなものを見つけて、それを伸ばせるようなキャリアや職業を見つけることが重要なのです。

<sup>99</sup>が見つければ、きちんとそれを勉強しなくてはいけません。私の好きなことは映画でしたが、映画のことは何でも調べました。映画の雑誌を表紙から裏表紙まで読み尽くして、大学時代の半分以上は映画館で過ごしたと言える位、映画漬

けの生活をしました。映画のことを知るうちに、英語の勉強も始めました。私にとって、英語を勉強したのはボーナスのようなものです。実際は、映画を楽しむために英語の勉強をしました。そして、キャリアを選ぶときに、語学と映画に興味があつたから字幕の道を選びました。

しかし、字幕の世界はとて大変な道でした。社会はとも厳しいです。「これがやりたい」と思っても、向こうから呼んでくれることは決してありません。ですが、自分の好きなことなのだから、それくらいは覚悟してチャレンジするべきです。

字幕の道に進みたいと思っただけれど、横道にそれて通訳の仕事もしました。ですが、当時の英語教育は活字だけの教育でしたから、私は英語を話すことができませんでした。思いがけず「俳優の通訳をしなさい」と言われて、三〇歳を過ぎた頃に、初めて通訳として英語を話したのです。初めて英語を話してうまくいくわけがありませんが、映画のことを勉強して色々なことを知っていたおかげで、なんとか仕事をつなげることができました。みなさんも、語学だけを勉強するべきではないと思います。語学だけではプロにはなれません。自分の道を究めたいと思ったら、語学だけでなく自分の分野に関して「敵はいないぞ」というくらいに突き詰めてほしいと思います。



戸田先生を紹介する司会の矢頭先生

## 語学の勉強法

語学の勉強には読む・書く・話す・聞くという四本の柱がありますが、それらをどのように勉強すべきか、という話をしたいと思います。私が思うには、四本の柱をバランスよく組み上げていくことが非常に重要です。また、語学を勉強するのに決して近道はありません。こつこつと、自分で弛みなくやっけていく他ありません。

現在は会話が重要視されているようですが、その反面、書

くことが十分ではないと思います。自分で書くことは、非常に実力のつく方法です。会話というのは素敵に見えますが、その場で消えていってしまうものです。つまり、ちよつと文法が間違っても許されてしまうのです。例えば、会話の中で三人称単数のsを飛ばしても通じてしまいます。しかし、三人称単数を飛ばして文章を書いてしまったら、「この人は教養がないんだな」と見抜かれてしまいます。紙の上であれば自分の間違いに気がつくことができますから、とてもいい勉強になります。人は、間違いから学ぶものです。

それと、読むということも非常に重要です。英語の本もいですが、みなさんには普通の本も読んでほしいですね。最近の若い方々は携帯を見つめていることが多いですが、生きていく上で一番重要なことを学ぶことができるのは本だと思います。本を読むときに、知らない言葉を全部辞書で引いて、一々書き込んでいく必要なんてありません。それでは嫌になつてしまいます。何度も出てくる言葉は辞書で引いてもいいですが、その他の単語は読み飛ばしても大丈夫です。そうしていくと、不思議なことに、最後には全部わかつているのです。とても難しい本は読むのに負担になりますから、私みなさんにおすすめするのはハリーポッターですね。あの本は、話は面白いし、英語もとても素晴らしいです。

先程、若い方々は携帯ばかり見つめているとお話しました

が、携帯というのは、要は「情報」ですね。しかし、現代では、情報というのは三年経ったら古くなってしまいうのだから、たつた三年で古くなってしまいう情報で頭を詰め込むのは、得なことでしょうか。一方で、永遠に古くならず、自身に身につくものというのは、情報ではなく「教養」と言います。教養というのは、自分で読んで考えて、自分で作り出すものです。教養がある人こそ素晴らしい。人間は脳みそという素晴らしいものを持っているのだから、きちんと自分の意見を持っていて言える人になるべきです。みなさんには、小さな携帯のスクリーンから離れて自ら世界を体験してほしいです。もちろん、時には失敗もします。でも、それが生きていくということですよ。携帯に頼るのもいいですが、はたしてそれでいいのかと自分で判断してきちんと考えるべきです。

### 字幕翻訳の世界

字幕翻訳の業界について少しお話しさせていただきます。ただ、非常に特殊な業界ですし、これを聞いたからと言って字幕翻訳者になれるというわけではないので、興味本位に聞いていただければと思います。

日本で映画を配給している会社には、字幕翻訳者は一〇人いるかないかぐらいです。その中でも、映画の字幕だけで三六五日生計を立てている人は、おそらく五、六人ほどです。

それくらい限られた業界なので、望んでも簡単には道は拓けません。

映画を観に行くととき字幕で見る人はどれくらいいるでしょうか。以前は字幕が主流でしたが、今は、アテレコが半分ほどではないでしょうか。よっぽど好きな人や勉強したい人は字幕にするかもしれませんが、字が読めない若者も多いため、需要に合わせてアテレコが増えています。ですので、今はアテレコと字幕の割合は五分五分。従って当然、字幕翻訳もますます狭き門になってきているわけです。

字幕翻訳の大変なところは、どんな映画が来るか分からないということですよ。映画会社から頼まれたらやるしかない。昔はフィルムでしたが、今はデジタルなので、制作過程のすべてにコンピュータが関わっています。私のパソコンにも映画の新作がたくさん入っているわけですが、セキュリティ管理にはより一層気を付けています。たとえば、スターウォーズだつて制作過程は秘密にしているし、翻訳者のせいで公開前に情報が漏れたら大変でしょう。

昔は技師の方がフィルムで映画をかけてくれたのを見るだけだったのですが、今はハイテクなので、コンピュータが苦手な私にとっては恨めしいです。実際に訳すときは、コンピュータ上で受け取ってから、すぐ作業に入ります。大作になればなるほど、制作、完成を急いでいます。フィルムとは

違い、コンピュータ上だと、何度でも修正が可能なので、映画監督は締め切りの直前まで映画修正に取り組みます。本来だと、宣伝もかねて公開する前にマスコミ各社に見せなければいけないのですが、おそらく007は、公開の四、五日前に、スターウォーズは劇場公開とほぼ同時にできたと言ってもいいのではないのでしょうか。

私は、一番多かった時には、年間五〇本ほど訳していました。一人では大変だし、助手を使いたいという人も沢山いましたが、字幕翻訳に、助手は使ってはいけません。というのも、映画にはドラマ、流れがあるからです。複数の人が同じ作品の翻訳に携わると、言葉遣いのニュアンスが変わり、キャラクターのイメージにも影響してくる。翻訳者によって変わってしまう。ですから、映画の流れを保つため、どの映画も一人の感性によって訳されています。初めて字幕翻訳をしたのは四〇歳になってからで、それまでは、仕方なく通訳の仕事をしていました。通訳はやりたくてやっていたわけではありません。

字幕翻訳には、守らなければいけないルールがあります。それは文字制約です。映画の字幕は大抵、セリフに比べて文字数が少ないです。例えば、AさんとBさんが会話をしている場面、Aさんが話している場面の字幕は、Aさんが話し終わると同時に消え、Bさんが話し始めたら、Bさんの字幕

が出ます。つまり、Aさんが話している間に読める長さの字幕を作らなければいけないのです。

映画館に行くのは、文字を見に行くのではなく、映画を楽しむためです。字幕というのは、映画の内容をよりわかりやすくするため、やむを得ず入っている物であって、負担になってはいけないのです。あくまでも客は画、俳優、アクション、ドラマを見たいのですから。

具体的には、字幕翻訳は一秒三文字の制限があります。例えば、*Michael studied in San Francisco for four years.* の英語は三秒で言えますね。日本語に訳すと、「マイケルは、サンフランシスコで、四年間勉強しました。」しかしこれだと、三秒の英語に対し、日本語が九文字に収まっています。こうした字数制限を考えながら、なおかつ意味が正確に伝わるよう訳すのが、字幕翻訳のルールです。この文だと、サンフランシスコは「この町」「あそこ」など、文脈によって短い単語を使えるかもしれません。

アテレコは全く違います。字数制限が無い代わりに、役者の口の動きに合わせて言葉を作ります。ですので、同じ映画でもアテレコ、字幕翻訳では全く内容が異なります。アテレコの方がこれからの時代は需要が高いと思うので、興味のある人はやってみても面白いと思います。

よく聞かれる質問ですが、映画のタイトルは字幕翻訳とは

全く関係ありません。惹き付けられるようなタイトルにするため映画配給会社が考えるものなので、翻訳者は何も手を加えていません。昔ほどの映画のタイトルも全て日本語に訳されていましたが、今はカタカナのままにすることが多いです。これもまた情報時代の余波なのですが、出来上がった映画が原本よりもずっと後になってから来るので、あらかじめ映画の内容を見てから公開に間に合わせるように字幕翻訳をつける時間的ゆとりがないからです。

『Bridge of spy』という映画は「スパイの橋」と日本語に訳すこともできるでしょうが、それではよく意味が分からないため、逆にお客さんを困惑させてしまうこととなります。ですから、『Bridge of Spy』程度の英語だったら、カタカナに訳したほうが、断然意味が通るわけです。

今度、日本に来る「オデッセイ」というタイトルの映画があります。これは、火星に取り残された男が、水やジャガイモ、何でも作って自給自足して生きていこうとする話です。原作名は、火星で生活する者、という意味で『The Martian』（火星人）なのですが、この映画のタイトルを「火星人」と、英語の原作名をそのままの日本語訳にしてしまうと、おそらく日本の人は、タコのような生物を想像しますよね。そんなると作品とは全く違うニュアンスになってしまうので、日本では「オデッセイ」という、その男が乗っていた宇宙船の名



会場には定員を越す参加者が集まった

前をタイトルにしました。これは日本の宣伝部が判断したものです。こうした過程を考えると、映画のタイトルを考えるのは、簡単な作業ではないと思います。

#### 質疑応答

● 戸田先生にとって幸せとは、何でしょうか。

幸せというのは「主観」です。他人が幸せかどうかではなく、自分が幸せかどうかということだと思います。自分の思

い通りに、自分の好きなことをできていること、時間がかかりましたが、今、こうして映画に関われる仕事ができていることが、私にとって幸せだと思います。

●時代によって映画のクオリティーが変わってききましたが、今後、映画はどのように変化すると思われれますか。

今後のことを予想するのは厳しいですが、今は、コンピュータで映画を見ることができるよう世の中になっていますから、一〇年後には、映画館のいらない世の中になっていると予想します。はたして、それがいいことかはわかりません。映画館というのは笑いや悲しみを共有できる場所です。家では味わえないようなすばらしい場所だと思います。

●戸田先生にとって上手い通訳とは、どういう通訳でしょうか。

通訳は望んだ仕事ではないので、一切勉強はしたことはなく、全て自己流です。でも、自分の立場をわきまえ、なるべく目立たないように、尚且つ、早く通訳するようにしています。しかし、機械のようになってはいけません。二人の間に立ち、良い雰囲気を作り出すことも大切な役割です。これが自己流の、上手い通訳です。

\* 石坂朋美 本学英米語学科四年

\*\* 大平桃子 本学英米語学科三年



講演終了後、戸田先生を囲んで